

---

# フェアリー・カカオ

夢石スイナ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

フェアリー・カカオ

### 【Nコード】

N7463Q

### 【作者名】

夢石スィナ

### 【あらすじ】

突如目の前に妖精が現れた。その姿は                      お題「チョコレート」  
で書いた2作目の短編作品。

「私は力カオの国からやってきた、チヨコ妖精よ！」

突然、お子様向けアニメのキャラクターが言いそうなセリフが耳に入った。

俺は別にテレビをかけているわけではない。突然目の前に人が現れたのだ。

それは『妖精』というイメージを覆すただの中年のおっさんだった。

おっさんはにこやかな表情でこちらを見ていた。

俺はあまりの出来事に一瞬、固まってしまった。

「……だ、誰かー！ 不法侵入者です！ 警察を！」

「ちよつと、やめてくれ！」

おっさんは先ほどのかすれかすれの甲高い声から一般男性の低音声になって、俺を止めに入った。

「勝手に人の家に入ってきて、何言っているんだよ！」

「私は君のチヨコから出てきたんだよ？」

と、また急に高い裏声に変えて答えるおっさんだった。

事の発端はこうである。

「直樹くん。はい、これ」

「え？ え？」

俺はクラスの子、池谷みことに屋上へ呼び出された。

そこで、池谷は照れくさそうに何かの包みを渡してきたのだ。

一年に一度のイベントを覚えている俺は、大体の状況は把握していた。

よりにもよって、全く好みじゃない女子からプレゼントを貰うことになるとは。

「俺甘いもの好きじゃな……」

と、言い終わる前に、池谷は俺の手に包みを握らせ、走り去ってしまった。

そう、今日は年に一度のチョコの日。バレンタインデーであった。

屋上には俺と、手には紫色の包みだけが残った。

しょうがなく貰ってしまったが、学校のゴミ箱に捨てようと思った。

だが、あの池谷の不気味な顔を思い出すと、なんとなく呪いがかかりそうな気がしたので、家に持って帰った。

包みを開けてみると、案の定チョコレートが入っており、手作りのか若干いびつなハート型をしていた。

やはり捨てようかと思ったが、何気に俺は甘党だったりする。

普通は嫌なやつからもらったものなんて食べないが、好奇心から一つ食べてみるかと、口に運んでみた。

だが食べた瞬間、口から勢いよく、煙が噴出したのだ。

「うお！！」

咳き込み、涙目になりながら俺は後悔した。

まさか、俺をハメるためにわざわざこの日バレンタインデーを選んだのか？

これはやられた。とてつもなくやられた。

そして目を開けると、そこにはチョコ妖精と名乗るおっさんが居たわけである。

「んで、おっさんあんたなんなんだよ」

「おっさんじゃなくてチョコ妖精よ！」

おっさんは胸を張り、言い張っていた。

「もういいよそれは。で、なんで家に侵入してるわけ？」

「侵入じゃない、召喚されたんだ」

自分では召喚という言葉が格好良いと思っているのかよく分から

ないが、自信たっぷりな表情に見えた。

「あーなんかよくわかんね」

いきなり自分の部屋におっさんが来るって事は、もしかや親父の客なのかと思っただが、考え直した。

こんな変なおっさんを客に迎えるほど俺の親父は変人だったか？  
そんな事を考えているとおっさんは話を切り出した。

「直樹くんにはみことちゃんと結ばれる運命にあるんだ」

俺は突然のおっさんの発言に驚いた。何故、俺と池谷が結ばれなくてはならない。それに、何故池谷みことのことを知っているんだ？  
「おっさん、もしかや池谷の親父さんだったり？」

「違う違う。私はチヨコ妖精だといっているだろう」

だんだん口調が普通のおっさんになっていく、チヨコ妖精と名乗るおっさん。

全く状況が把握できないので、とりあえず話を聞くことにした。  
話によるとチヨコ妖精は愛のキューピッド的存在であり、バレン  
タインデーに現れるらしい。愛情込めたチヨコレートに宿る妖精で、  
俺と池谷をくつつかせたいようだ。

「みことちゃんのことを好きになってくれ」

「無理」

俺は即答した。

「何故だ！ 確かに彼女は頭も悪いし、時間にルーズだし、短気かもしれない」

「あ、そうなの？ 知らなかった」

「でも君を思う気持ちは誰にも負けないはずだ！」

「そんな事言われても、好きじゃないものは好きじゃないし。それに」

「それに？」

「キューピッドっていうのはお互いが知らない間にこっそり手助け

してやるものだ。愛っていうのは誰かが強制するものじゃない。」

そして俺は一息ついて言った。

「愛は自然と生まれるものだ」

その言葉におっさんは何か衝撃が走ったかのような顔をした。

そして、そうかと納得したかのようにつぶやいた。

「分かったなら帰ってくれ」

「よし、君が望むなら私は影ながら応援するぞ！」

「え？ 応援しないでいいって!!」

「ではさらばだ！」

「おい、おっさん！」

なんだかよく分からないが、おっさんは帰っていった。

俺は安心して、いつも通りの夜を過ごした。

翌日、学校に行くとあのおっさんの影がチラチラしているのがウザくてしょうがなかったのは言うまでも無かった。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7463q/>

---

フェアリー・カカオ

2011年10月8日17時45分発行